

# テーブルみたいな福祉施設

日常を繋ぎとめる障害者支援+高齢者福祉「施設」  
横浜市郊外住宅地 上郷地区をケーススタディとして

私は小学生から横浜市の郊外住宅地「上郷」で生活してきた。その私の住むまちには、老人福祉「施設」をはじめとした「施設」の計画が予定されている。いわゆる「施設」的なそれらの建築は**社会に対して閉鎖的になりやすく、日常から切り離されてしまう傾向にある**。本提案では、福祉施設が都市に、日常にどのように編み込まれるかについて考える。

まちには**様々な活動が現存している**。しかし、同時にまちの高齢化や衰退に伴いそれらの活動は持続可能性を失いつつある。まちではこれらの活動のネットワークこそが日常を支えており、本提案ではそれらの活動**をサポートすることで建築やその施設の利用者が主体的で相互依存的にまちへと関わっていく**ことについて考える。  
写真：まちのリサーチより（本人撮影）▶

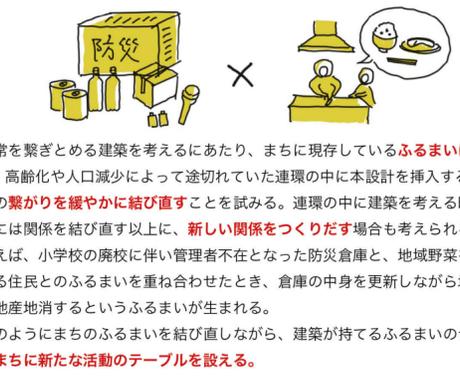
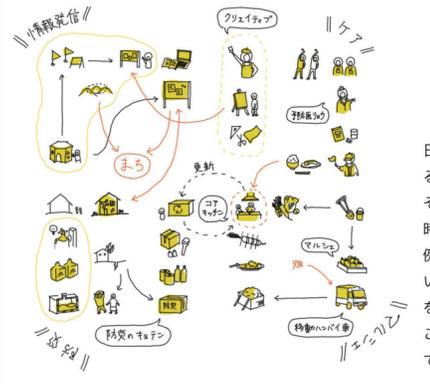


■主題：テーブルみたいな建築  
世界の中に共生するということは、本質的には、ちょうど、**テーブルがその周りに座っている人々の間に位置しているように、事物の世界がそれを共有している人々の間にあるということ**を意味する。つまり、世界は、全ての介在者と同じように、**人々を結びつけると同時に人々を分離させている**。  
「人間の条件（ハンナ・アーレント）」  
福祉「施設」がまちの中で人々の共通世界の中に位置するような**「テーブルみたいな建築」**を目指す。

## ■差異のジレンマ

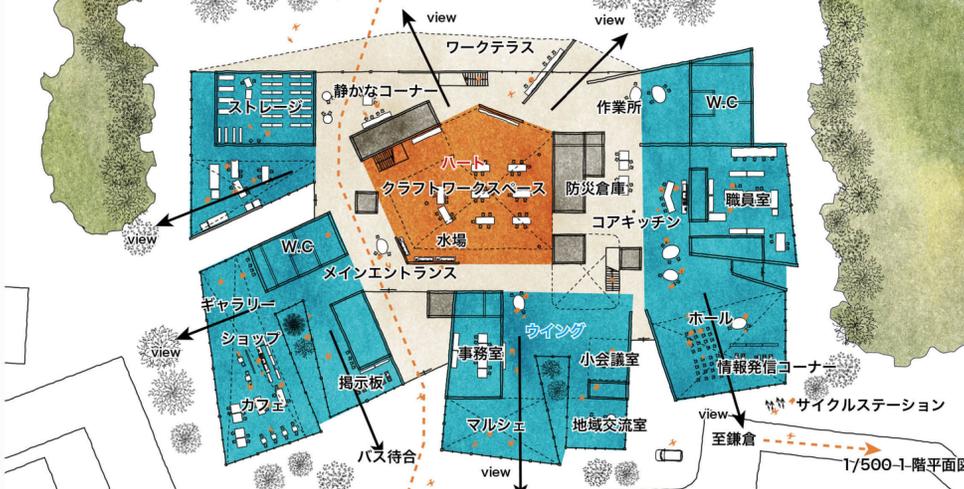
福祉「施設」に入ることは何か差異を認め、守られること、助けを借りることのように思われる。しかし、そういった認識が**「ケア」の認識を歪め、私たちの日常との差をかえって拡大している**場合がある。本提案では**「ケア」の対象は万人へと拡大する**。守る、助ける、世話をする、「ケア」の矢印は身体的・感覚的・知的の差異に関わらず、さらには人・建築・都市の垣根を超えて普遍化される。本提案が融合されたまちでは、人々は**主体的で相互依存的な関わり**の中に生活を営む。やがてまちには**日常のある福祉「地域社会」**が形成される。

## ■日常を繋ぎとめる福祉施設

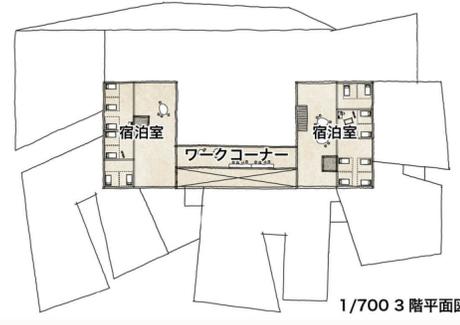
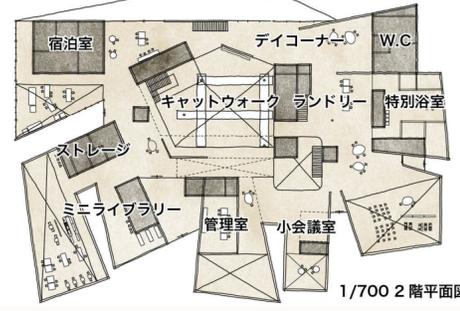


日常を繋ぎとめる建築を考えるにあたり、まちに現存している**ふるまいに着目**する。高齢化や人口減少によって途切れていた連続の中に本設計を挿入することで、その**繋がりを緩やかに結び直す**ことを試みる。連続の中に建築を考える時、ある時には関係を結び直す以上に、**新しい関係をつくりだす**場合も考えられる。例えば、小学校の廃校に伴い管理者不在となった防災倉庫と、地域野菜を育てている住民とのふるまいを重ね合わせるとき、倉庫の中身を更新しながら地域野菜を地産地消するというふるまいが生まれる。このようにまちのふるまいを結び直しながら、建築が持つふるまいのデザインで**まちに新たな活動のテーブルを設ける**。

## ■守りながら開く、活動が溢れ出る「ラジエータ型配置」



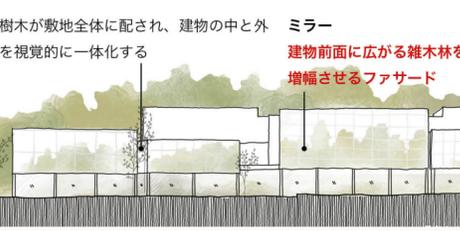
主体的で相互依存的な関係をつくるためにメインプログラムとして障害者支援のクラフトワークスペースを中央に配置する。ここは建築の心臓部である**「ハート」(クラフトワークスペース)**での活動がラジエータが放射するように**周囲に気配や活気が拡がっていく**ことを期待して、「ウイング」が突き出す**「ラジエータ型」配置**を採用する。「ウイング」として**カフェ・ギャラリー・マルシェ・情報発信・ストレージ**のプログラムが配され、その間は**豊かな周辺環境を絡みとるような庭**になり、様々な方角に対して手を伸ばしている構成をとる。様々な活動を許容する一体的には大きなスケールを持ちながら、周辺に対しては**アーバンパブリックの基調となるような押えたスケール感**を保っている。**行き止まりのない経路と選択性の高い通り抜け**の計画はまちに新たな交差点のような配置となっている。



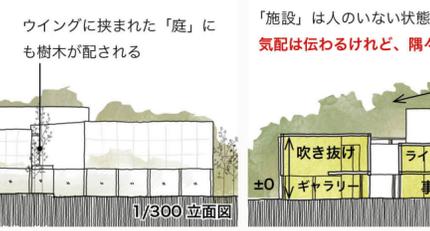
## ■郊外住宅地：横浜市栄区上郷

敷地は丘の上の住宅地にある。南端は住民の交通の要所、地元小学生やお年寄りの交流、鎌倉山への登山口など日常的風景が移り変わる場所に本設計を提案する。

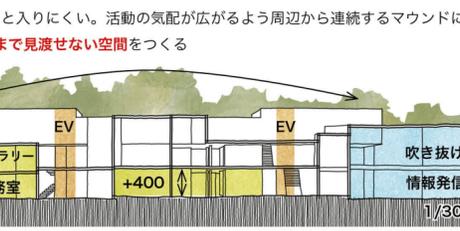
## ■豊かな周辺環境を増幅させる仕掛け



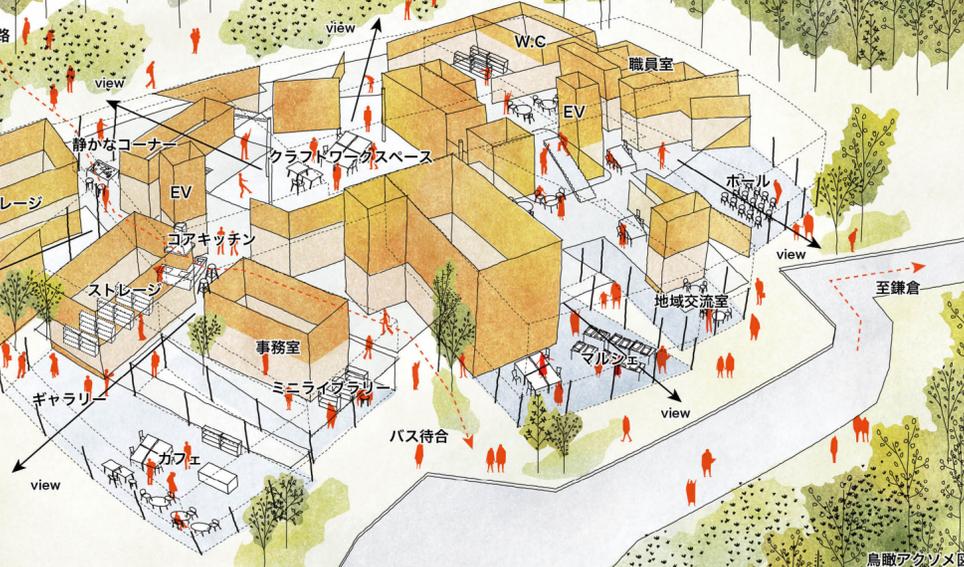
## ■小さくマウンドをつくる、活動が見え隠れる



## ■豊かな周辺環境・地域住民の流れにตอบสนองし、まちに表情をつくりだす構成



## ■豊かな周辺環境・地域住民の流れにตอบสนองし、まちに表情をつくりだす構成



福祉「施設」の開き方について考える。障害者支援のクラフトスペースに加えて、小規模ホールやギャラリーなどを含む地域活動のテーブルであり、公民館や中央施設のように捉えて建築を考える。福祉「施設」としてつくると地域住民が必ず利用するとは限らず、このような建築が使われる建築になるためには**いつでもその施設の活気が満ちている**ことが必要だと考える。**豊かな周辺環境や人の流れにตอบสนอง**しながら様々な表情をつくる活動のノードとなるような平面・配置構成をとり、丘の南端に新たな居場所をつくる。



## ③メインエントランスと小さな庭をみる

周辺から中の**活動がしみ出るような「ウイング」のユニット**が配され、それらの間には樹木が植わり外部と視覚的に一体化している



## ④クラフトスペースから踊り場をみる

2階ディールームへの階段ではあるが、このクラフトスペースにせりだす**踊り場はステージのような役割も持ち**日常の中にもハレをつくる

## ■地域に小さな循環を生み出す、小商いと食の経済



本敷地において主体的で相互依存的な地域社会を支えるのは**「小さな商い」と「食によるネットワーク」**による循環だと考える。これらの循環には、人口が縮減する定常化社会を支える理論が組み込まれている。資本の拡大を目的としない小さな循環の中には、**お祭りや収穫**のような「まちの祝祭」を演出し、その祝祭的な活動により**地域社会がコミニグされる仕掛け**がある。活動が**地域社会を支え、地域社会もまた活動の強度によって支えられて**おり、このような連続の中にある福祉「施設」を考えることはこれからの定常化社会における新たな可能性を提示している。